



地方からのホットライン（令和7年1月）



今回は、「思い出の映画」についてお書きいただきました。皆様もきっと懐かしく思い出されるのではないのでしょうか（執筆者の皆さん、スペースが少なくてすみません）。

● 相良 直哉さん(宮城県仙台市在住)

私の思い出の映画は、「マイウェイ」です。1972年、南アフリカ/イギリス制作エミールファルフィルム。この当時は、中学生が勝手に映画館に入ることが禁じられていました。校則でも、文部省推薦の映画でなければ映画館への出入りは禁止されていたのですが、私はこの映画を映画館で観ています。ストーリーは、皆さんご存知でしょうから割愛しますが、この映画がキッカケで、私は現在に至るまで映画・サントラを愛するファンとなりました。現在、EP・LP・CD・DVD コレクターとして1000枚以上を所有しています。「いやあ、映画って本当にいいものですね・・・ではまた！」

● 金子 幸雄さん(山形県山形市在住)

中学生の頃、日活で石原裕次郎や小林旭が人気沸騰の中、日活第三の男として彗星のように銀幕を駆け抜けた男「赤木圭一郎」。日本人離れした風貌の格好良さと孤独感を併せ持つ赤木圭一郎のファンになりました。主演映画は全て観ましたが、中でも遺作となった『紅の拳銃』が好きで、今でも笹森玲子演ずる盲目の娘との哀愁たっぷりの恋、手術で視力を回復した彼女が列車の中で圭一郎と再会するシーン、それに対して無表情を装う圭一郎。あのラストシーンを忘れません。中学生時代の甘酸っぱい思い出の1ページです。

● 丹野 智彦さん(福島県安達郡在住)

私の思い出の映画は、「旅の重さ」という素九鬼子原作・斎藤耕一監督・高橋洋子主演のあまりメジャーではない作品です。この映画は、大学入学後に新しくできた友人に誘われて初めて行ったオールナイトで上映されていたもので、確か池袋の映画館で観たように思います。これをキッカケにオールナイトシネマに嵌り、情報誌「ぴあ」を頼りに友人と面白そうな映画を探して鑑賞しまくりました。鑑賞後は池袋なら「純喫茶蔵王」、新宿なら「純喫茶六本木」で食べ放題のトーストをかじりながら映画の批評をしたり次に観る映画の検討などをしていました。この映画が学生時代の楽しい思い出を作ってくれました。

● 吉羽 文雄さん(埼玉県さいたま市在住)

以前は、年間10～15本くらいの映画鑑賞をしていましたが、近年は4～5本と少なくなりました。その8割は洋画です。昔、「読んでから観るか、観てから読むか」という角川のCMキャッチコピーがありましたが、当時の私は、「読んでから観る」派でした。

心に残る一本を、との求めでしたが、それは難しいので、今も心に残っている映画を3本挙げます。「天平の甕」「窓際のトットちゃん」「寅さんシリーズ」の3本です。SFX主流の現在、名監督、名俳優、名作品は、なかなか生まれませんね。

●堤 満弘さん(長野県長野市在住)

下村湖人の名作「次郎物語」が学研・西友制作、東宝配給で1987年に一般公開されました。代理店関係者を招いて事前映写会を実施したのですが、青森と弘前の会場で制作側を代表して舞台挨拶をすることになり、映画に出演している訳でもないのに、二度とできない貴重な経験をさせていただきました。この経験が今の仕事にも役立っております。

●影山 皓一さん(静岡県浜松市在住)

初めての映画は、小学2年か3年の頃、意味など分かる筈もない戦争映画でした。なぜ子供の私にこの映画を見せようとしたのか、今でも理解できません。長じて大学生の頃に神田神保町・南明座で観た「飢餓海峡」が印象的です。過去を暴かれることを恐れた犯人役の三國連太郎が殺すこともない左幸子を殺すストーリーが強烈な印象として残っています。その後は、ベンハー、TVドラマの「おしん」、韓流ドラマの「チャンギムの誓い」などが好きで今でも飽きずに何度も観ます。もう今では、TVでの洋画鑑賞がせいぜいです。

●早川 正英さん(愛知県愛知郡東郷町在住)

80～90年代の洋画は、観ていて楽しく元気になる作品が多い。スターウォーズ、スピード、MIP、トップガン、ダイ・ハードなどなど。この頃に観た映画は、仕事への活力や多くの感動を与えてくれました。私が強いて一作挙げるとすれば、プリティ・ウーマンです。コールガールのヴィヴィアンがリチャード・ギア扮する実業家との出会いをキッカケに見事に変身していくシンデレラストoryは、サウンドとも噛み合い痛快そのもの。何とんでもビバリーウィルシャー・ホテルのトンプソン支配人の演技は受けました(笑)。

●渡邊 洋二さん(愛知県春日井市在住)

初デートは高校2年生の1977年9月、松竹映画の渥美清2本立でした。1本目は「男はつらいよ 寅次郎と殿様」で、伊予大津市を舞台にした嵐寛寿郎と寅さんの絡みに爆笑し、真野響子のマドンナに魅了されて同級生の彼女も笑顔で満喫。2本目はこの日が公開初日の「八つ墓村」で萩原健一が主役、ヒロインは小川真由美、渥美清の金田一耕助は語り部役。鍾乳洞でのショーケンと小川真由美の濃厚な濡れ場では小生も彼女も真っ赤な顔で無言。我が故郷大分での純情な青春時代の良き思い出です。

●三好 進さん(愛媛県松山市在住)

敢えて一作を挙げよと言われるなら、昭和29年上映の「ゴジラ」です。当時私は小学校4年生(10歳)で、学校からの許可もあって初めて映画館で観た映画でした。ゴジラによって建物が踏み潰されたり、放射熱線で鉄道や戦車が溶かされたり、その特撮技術に恐怖と興奮を覚えました。またゴジラの鳴き声やテーマ音楽にも魅了(後年、携帯の着信音に使用)。あれから70年、昨年公開の「ゴジラ-0.1」まで30作(他に海外作5作)を全て観てきた「ゴジラ」オタクです。「ドシラ、ドシラ、ドシラソ、ドシラ〜」……それでは皆さん、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。